

gerontology の日本語訳が「老年学」に定着する過程の中で宮城音弥さんの「人間年輪学」の含蓄を考える。

老年学土曜随想《第1号》2005年2月12日

「人間年輪学」っていう学問をご存じですか。家の近くの古本屋では岩波新書や中公新書などを100円で売っているのです、よく利用します。そこで宮城音弥著『人間年輪学入門』という1980年刊の岩波新書を見つけて買いました。心理学には門外漢の私でも、東京工大の教授だった宮城音弥さんはよく知っています。岩波新書に『心理学入門』や『精神分析入門』など、心理学の入門書的なものを何冊も書いていましたから。

人間年輪学というのは宮城さんが gerontology に与えた名称です。この本が出版されたのは今から25年前。その頃老年学という言葉はもうありました。日本老年学会も存在していました。それなのになぜ宮城さんは「人間年輪学」という名称を提唱したのでしょうか。

それを述べる前に、老年学という言葉が日本に定着する経緯を日本老年学会が創設される過程の中で見ておきましょう。日本老年医学会のHPを参考にさせていただきました。

1956年（昭和31年）12月第1回日本ジェロントロジー学会が東京で開催され、下部組織として老年医学部会と文化科学部会が設けられました。2年後の1958年（昭和33年）11月に第3回日本ジェロントロジー学会が名古屋で開催され時、総会で名称の改称が決定され、日本ジェロントロジー学会は日本老年学会、老年医学部会は日本老年医学会、文化科学部会は老年文化科学会とすることが決まりました。この老年文化科学会は翌1959年（昭和34年）5月日本老年社会科学会と改称されました。

そして1959年（昭和34年）11月7日 第1回日本老年学会（第4回日本ジェロントロジー学会に相当する）が東京で開催されました。この総会をもって日本老年学会が発足し、その分科会として日本老年医学会および日本老年社会科学会が発足しました。

このような学会名称のジェロントロジーから老年学への変更の経緯から考えて、「老年学」という言葉は1956年から1958年の間に日本に定着したと言えるのではないのでしょうか。

これで分かるように、老年学という言葉が日本に定着したのは宮城さんの本が出版される20年以上も前のことです。また宮城さんは日本老年社会科学会の初代会長に就任した渡辺定氏に誘われ、この学会に参加しています。ですから老年学の動向をよく承知していたわけです。知っていたからこそ敢えて老年学に代わる新しい名称を提唱したのでしょうか。ではなぜ「人間年輪学」という名称を提唱したのでしょうか。

宮城さんはこの書の序で「年とともに年輪を重ねていく人間の姿の研究は、『人間年輪学』とよぶのが適当であろう。」と言って、加齢を「年輪を重ねていく」というメタファーでとらえています。

「年輪を重ねていく」というのはとてもいいイメージですね。年輪を重ねすぎたから衰退するとか、ここが年輪の限度でこれ以上はない、とかいう感じは浮かんでできません。加齢とは無限に人としての厚みを増していくこと、と宮城さんはとらえていたのでしょうか。彼はこの本で「年の功」という言葉をよく使っています。

ところが当時の日本の老年学は宮城さんのこのイメージに合うものではなかったのでしょうか。だから老年学という言葉がすでに定着していたにも拘わらず、宮城さんは gerontology という英語に敢えて「人間年輪学」という言葉を当てたのではないのでしょうか。

アメリカにおける Gerontology の歴史を見てみると、1940年代に生物学で老化に関する理論的関心が高まっていることに気づきます。そして50年代から60年代に掛けて次々と老化の学説が発表されています。56年には Harman による遊離基説 (Free Radical Theory)、

61年には Medvedev によるエラー説 (Error Theory)、62年には Strehler が "Time, Cells, and Aging" を出版しました。さらに 62年には Bjorksten による架橋結合説 (Cross-linking Theory) と Walford による自己免疫説 (Autoimmune Theory)、翌 63年には Curtis による体細胞変異説 (Somatic Mutation Theory) と、老化学説の目白押しです。半世紀程前には gerontology は生物学的視点からの老化学説の花盛りだったのです。

このような生物学的な老化の学説が老化をどのようにとらえたのか、私は詳らかにできませんが、それでも Strehler は有名で老年学の本には必ず出てきますから、彼の言う aging の 4 つの特徴くらいは知っています。柴田博他著『老年学入門』には次のように書かれています。

「Strehler は老化現象として 4 つの基準を提唱している。」として (1) 普遍性 (2) 固有性 (3) 進行性 (4) 有害性という 4 つの基準を説明してあります。問題は最後の有害性です。有害性の説明を見てみましょう。「老化現象でもっとも特徴的なものとして機能低下 (有害性) がある。機能は直線的に低下し、死の確率は加齢と共に対数的に増える。普遍性、固有性、進行性は発育期や成熟期にあてはめることができるが、この有害性によって老化は明確に区分される。」とあります。つまり Strehler によれば老化は有害なのです。年輪どころではありません。

このように老化を有害にとらえる生物学的老年学の花盛りの時期に、心理学的視点から老化を肯定的にとらえた理論が出てきます。生涯発達理論です。その代表の一人 Erikson は恩師フロイトが成人期以降の発達には触れていない点を補い、全生涯を視野に入れた発達理論を展開しました。この理論は 1950 に出版された「Childhood and Society」で明らかにされます。しかし生物学的老化理論が一気に花開いたのに反して、生涯発達理論は 70 年代から徐々に発展していきます。アメリカでは 70 年には Palmore の編著による『Normal Aging』が、1973 年には Baltes と Schaie の共著『Life-span developmental psychology: personality and socialization』が、79 年には Newman の『Development Through Life』が出版される、といった具合です。日本はさらに遅れていて、この Erikson の著書が仁科弥生によって翻訳され、みすず書房から『幼児期と社会 1』として出版されたのは 1977 年、原著から遅れること 27 年です。

ですから宮城さんがこの著書を書いていた 1970 年代の後半には、日本では老年学には生涯発達理論的な視点からの研究はあまりなかったのではないのでしょうか (当時発表された研究論文のテーマなどをきちんと調べていませんので、間違っているかも知れませんが)。しかし心理学者であった宮城さんは、それまでの自分の研究と、アメリカの心理学が老化を肯定的に評価し始めているという流れとから、「成年から熟年に入るにしたがって、人間は心身ともに衰えるのか。すくなくとも精神的には、年の功によって、判断力も思考力も若い人たちよりすぐれた能力を発揮できるのではないか」という問題意識を持つに至ったのではないのでしょうか。そして「人間年輪学」という名称を提唱したのでしょうか。

この本には外国の参考文献も出ていますが、不思議なことに Erikson も Palmore も Baltes もありません (Erikson は一カ所出てきますが、それは生涯発達理論とは直接関係するものではありません)。しかし私のような高齢者には宮城さんの一番最後の言葉が励みになります。「人間の心とからだは使い過ぎて老化するものではない。『さびつくより、すり切れるほうがまし』 (It is better to wear out than to rust out.) という英国のことわざは、つねに真理である。」

折角の人間年輪学という名称も宮城さん一人だけで終わりました。しかし gerontology の新しい日本語訳を「長寿社会の人間学」としてはどうか、など、gerontology を「老年学」

以外の名称に変えようという意見は今もあるようです。

認識の客観性には対象に対する愛が必要 北朝鮮のシュートから学んだ現象学
老年学士曜随想《第2号》05年2月19日

首相や官房長官までが「政治とスポーツは別だ」という談話を出し、厳戒態勢の下で行われた北朝鮮とのサッカーの試合は、日本が2対1で勝ち、無事終わりました。しかし私はこの試合の4日後の13日日曜日の朝、突然この試合の衝撃に打ちのめされました。それはTBSテレビで関口氏が司会するサンデーモーニングを見ていた時のことです。

スポーツジャーナリストの中西哲生氏が、あの試合で北朝鮮がゴールを決めた場面をこう解説したのです。「まずゴールキーパーの川口の守り方がよくなかった。失点は彼のミスによるものです。あのシュートは狙ったものではありません。たまたまあそこに来たのです。そこがサッカーの怖いところです。狙ってあのようなシュートができる選手は世界に一人か二人しかいません。だから狙ったものではないのです。」

司会の関口氏は「言い訳はこのくらいにして」と言葉を挟みましたが、この言い方に私は違和感を感じました。「言い訳ではなく、分かりやすく解説をしていただけじゃないか」と私ですら思ったのですから、当の中西氏は「言い訳じゃないですよ」と抗議口調で言いました。

あのシュートの場面を「コーナーに狙いを定めた素晴らしいシュートには、名手川口でも手が届かず、防ぎきれなかった」と思っていた私は、この中西氏の解説に衝撃を受けました。しかし「専門家の見方は違うもんだ」と素直に中西氏の見方を受け入れました。ところが関口氏の受け取り方は違ったようです。「言い訳はこのくらいにして」という言葉には、あのすごいシュートを決められた口惜しさから中西氏がシュートの素晴らしさを素直に評価していないと感じた関口氏の不快感が表れているように思いました。

一つのシュートの見方が専門家と素人との間でこれほどまでに違うことに私は本当に驚き、衝撃を受けました。私が中西氏の解説を素直に受け入れたのは、彼の方がサッカーに関する情報量をはるかに多いからです。しかしあのシュートが狙ったものじゃないということがどうして分かるのか、など疑問はありました。こんなことはシュートした本人に聞かなければ分からないじゃないか、とも思いました。本人に聞けば「もちろん狙ったシュートです」と言うでしょう。しかしそれが真実かどうかは分かりません。所詮真実は藪の中か、とも思いました。

何はともあれ、中西氏以外の同レベルの専門家に聞いてみよう。そうすれば関口氏が感じたような言い訳的な偏見が中西氏にあったかどうか分かるのではないかと、思いました。サッカーという点では幸い私にはすごい専門家の友人がいます。長沼健氏です。彼は東京オリンピックの日本チームの監督ですし、数年前までは日本サッカー協会の会長でした。彼とは会社に同期入社以来もう半世紀にわたる付き合いがあります。

電話してみると幸い彼は家にいました。ことの顛末を話し、彼の意見を求めました。彼は素人の私にも分かるように、詳しく説明してくれました。彼の説明に私の解釈も加えて、書いてみます。

まずゴールキーパーの川口は明らかに誤りを犯していたのです。「敵がシュートするまで、動いてはいけない」という鉄則があるのに、彼は敵がシュートする前に左側へ動こうと重心を移していた、そうです。彼はゴールの真ん中に立っていたのではないのです。彼の右側に比べて、左側はゴールが大きく開いていて、彼はそこを狙ったシュートが来ると

思ったからでしょう。

しかし実際のシュートは右側に来ました。左へ動こうとしていた彼は、とっさに右へは動けず、シュートを防ぎきれなかったのです。長沼氏は「シュートの後、座り込んだ川口の様子を見ると、彼には自分の失敗がよく分かっていた」と言いました。確かにテレビの画面にも、地べたに座り込んでがっかりしていた川口の姿が映っていました。

ではあのシュートは、川口の予想の逆を突き、彼の右側のコーナーぎりぎりを狙った素晴らしいシュートだったのか。長沼氏は狙ったものではなかったと思う、とっていました。まぐれで結果オーライとなったシュートだということです。中西氏と同じように、それを狙える選手は世界に数少ないと言っていました。

この長沼氏の説明で、中西氏が「川口のミスです」と言った意味がよく分かりました。そして川口の左側が大きく開いているのに、そこを狙わずに少ししか開いていない右側のコーナーぎりぎりを普通のレベルの選手なら狙わない、だからあれは狙ったシュートではない、ということも分かりました。

北朝鮮のシュートを取り上げて、このようにぐちゃぐちゃ書いているのは、私にとってこれが単なるスポーツの話ではないからです。シュートという一つの事象に、これだけの見方の違いができる、われわれの認識の恐ろしさを感じたからです。

研究の方法論という視点から言えば、ここで私がやっていることは質的研究です。それで質的研究の客観性はどのようにして保証されるのか、ということが気になったのです。もし研究のテーマにこのシュートを採り上げ、「これは名手川口も手が届かなかった程コーナーぎりぎりを狙った素晴らしいシュートだった」と結論すれば、中西氏や長沼氏のレベルにある先生方から、「お前の目は節穴か」と激しく批判されることは間違いありません。「認識に客観性などあるはずがないじゃないですか。私にはそう見えたんです。」と開き直るにはちょっと問題があります。研究者が研究対象に関する十分な情報を持っていないければ、その認識には客観性がない、と言えるのではないのでしょうか。

こう言い切れるのは私がある文を思い出しているからです。私のところには、立教大学教授として現象学の立場から心理学を研究しておられた故早坂泰次郎先生の「関係からの発想」という小冊子があります。先生から寄贈いただいたものです。その中の文です。

「学生からはじめて、(ハンドボール)部長になってほしいという依頼を受けた時、「ハンドボールって名前はきいたことがあるけれど、一体どんたゲームなんだい?」と反問したら、学生が解説書をもってきてくれた。今ではもちろん、ゲームのルールや見どころはわかったが、いまだにとまどうのはレフェリーの吹く反則のホイッスルである。ホイッスルが鳴つてから、「ああ、そうだったのか」とわかるのがほとんど毎回のことである。部長としてベンチに控えの選手と一緒に座っていて、彼らと肩をならべ、目を凝らして一生懸命見ているのだが、見えないのだ。科学史家の村上陽一郎氏も似た経験を書いていた(「新しい科学論」講談社ブルーバックス)。医師がシャウカステンにレントゲン・フィルムを挟んで写真の説明をしている。映像を指しながらいろいろと説明してくれるが、素人である患者には、いくら眼を凝らしてみても、何だかよくわからない。医師の眼にハッキリ見えているモノ(物体 object)が、素人には見えないのだ。

秘書が時々私のデスクの上に花を生けてくれる。来客や学生の応対やら電話やらで忙しくしている私は、それに気がつかない。一両日してはじめて花に気づき、「お、きれいな

花だね」というと、秘書嬢はニヤニヤ笑いながら「先生、それおととい生けたんですよ」という。「心ここにあらざれば、見れども見えず」という、古い諺を思い出す。こうした体験は、われわれの知覚の、より基本的には認識のありようをハッキリと教えてくれる。」

北朝鮮のシュートは私に「認識のありようをハッキリと教えてくれ」たのです。私には「素晴らしいシュート」と映ったものが、専門家には「まぐれのシュート」と見えるのです。ではなぜこれだけ認識に差ができるのか。

再び早坂先生の文に戻ります。この文の一番最後で先生はこう書いておられます。「ハンドボールの控えの選手に、一瞬の反則が見えるのは、彼がゲームにからだでかかわってきたからだ。彼はゲームの中で、ボールとともに、あるいはルールとともに生きている。私のように野次馬的に外から見て、眺めて、いるのではないのだ。シヤウカステンを前にした医師も同じことだ。

すなわち、真に見るとは、対象とのかかわりに入ること、対象との関係に入ること、それとともに生きることができて初めて、可能になるのだ。それができるようになって初めて、その分だけ今まで見えなかった面や部分が見えてくるのだ。こうした関係が、対象への関心から始まることは当然だ。E・フロムはそれを「愛」と呼んでいた。対象への愛があってこそはじめて、対象はそれだけハッキリ見えてくる。人々は普通、正確で客観的な認識には愛などは邪魔だと見なしがちだが、これは誤りだ。対象への愛はむしろほんとうにハッキリ見るための、いいかえれば真の客観的認識のための、必要条件だというわけだ。私も同感である。」

中西氏や長沼氏と私や関口氏との認識の違いは、実はサッカーに対する「愛」の違いということになります。何十年もサッカーに心血を注いできた長沼氏と、話題の北朝鮮との戦いだからといって、その日に限って懸命に見ていた私との、サッカーに対する「愛」の違いが、認識の違いを生み出した、と言えるのではないのでしょうか。

そして認識の客観性とは、対象から一步下がって自分とは関係ないものとして対象を見る（デカルトやウエーバーを思い起こして下さい（注））のではなく、「対象とのかかわりに入ること、対象との関係に入ること、それとともに生きることができて初めて、可能になる」という現象学的な認識論が、このシュートのお陰で私にもやっと理解できたように感じました。

（注）われわれは知らない間にデカルトの近代的自我の影響を強く受けているわけですが、これが介護の妨げになっているという指摘を村田久行氏（京都ノートルダム女子大教授）がしています。傾聴ボランティア活動をしている私は、これは傾聴に値する指摘だと思っています。またマックス・ウエーバーが価値判断からの自由を社会科学における認識の客観性を保持する条件と考えていることはご承知の通りです。（終）

リアリティを把握する難しさ 介護者と利用者との関係の真実?

老年学土曜随想《第10号》05年4月16日

介護者は利用者にいじめられているのか。

桜美林大学の大学院には福祉関係の仕事をしている人が多く参加しています。平日の夜と土曜、日曜にしか授業をしないという仕組みからも、仕事を持っている方々に学んでほしいというこの大学の考えが読み取れます。

ある先生の講義は、学生にこれまでに研究したものを発表させ、それを基に先生や学生が論議するという内容です。ある日のAさんの発表は、私にとってとても衝撃的でした。

利用者によりサービスを提供するには、介護者自身が肉体的にも精神的にもよい状態ではないといけない、という信念をもっているAさんは、果たして現場はそうになっているのだろうか、という疑問を持ち、調査することにしました。それで福祉関係の9施設で働いている450人を対象にストレッサーとしてどんなものがあるかという調査を、質問票を送付し、記入してもらい、という方法で行いました。この質問票は焦点を介護者が利用者から受けるストレスという点に置いていました。その結果37%の166人から回答を得ることができました。

この調査の結果はAさんの想像をはるかに上回る過酷な状況を示していました。回答者166人中67人が「最近1ヶ月以内に利用者の言動で精神的なショックを受けた」と答えました。内容は、罵声を浴びせられたり、暴力を受けたり、セクハラされたり、などです。それが原因で体調の悪化さえ引き起こしている人が17人もいました。介護者はAさんの予想以上に利用者から大きなストレスを受けているのです。

もっと実情を知りたいと考えたAさんは、調査の第2段階としてショックを受けた67人にインタビュー調査をしたいと考え、その協力依頼をしました。67人の内で20人から承諾を得、その人たちにAさんは個別に面接をして、より深い情報を得ようと思いました。

ところがこの面接がまたAさんの予想を裏切ることになったのです。Aさんにとっては意外な展開を示したのです。面接では当然利用者から受けたショックについての話が出てくると、Aさんは予期していました。ところが何と出てくる話しは全く別のものでした。Aさんが予想もせず、そのために調査票の質問項目にも入れていなかったことが次々と語られたのです。Aさんがもっと詳しく知りたいと思っていた利用者からのストレスは全く語られませんでした。

それは施設のマネジメントに関する苦情でした。組織運営上の問題や給料に関する不満などです。具体的には次のような話が出てきました。

- 仕事が自分の計画した通りに行かない。
- 上司も部下も自分を理解してくれない。
- 自分の意見を100%出せる雰囲気ではない。
- 上司と考え方が違う。
- 時間にゆとりがない。

○自分一人では解決できないことが多いのに上司が相談に乗ってくれない。

○自分の給料の額に納得できない。

等々でした。

これではマネジメントの不在としか言いようがありません。このような苦情ばかりが出てくるということは、いかに組織としてのマネジメントがきちんと行われていないか、ということを示しています。

このAさんの発表が与える介護者のイメージは、利用者からは不当な言動によって責め立てられ、他方頼りとする組織はマネジメント不在で彼らを支援してくれない、という有様で、いわば「前門の虎、後門の狼」、両面から責め立てられる苦しい状態に陥っている、というものです。

このようなAさんの発表があった時、私は老人施設には接していませんでした。これは大変な状態だな、日本の福祉は施設介護者の奴隷労働にも近い過酷な労働条件によって支えられているのだなあ、と驚きました。

それから2年経ち、その間にデイケアセンターや特別養護老人ホーム、グループホームなどで傾聴ボランティア活動の経験を積んだ今の私は、Aさんの発表に違和感を感じています。マネジメント不在という点はよく分かりません。しかし利用者と施設介護者との間のいわば力関係は、私が接している特別養護老人ホームでは逆のように感じます。一口で言えば、利用者は介護者を恐れています。介護者に乱暴などできません。

この特別養護老人ホームは2階から4階までが居住区になっていて、利用者の要介護度と階数とは逆の関係になっています。つまり要介護度の低い人ほど上の階にいる、ということです。私が接している人は2階と3階の人たちですから、一度見せてもらっただけの4階の人たちの様子はよく知りません。油絵を描いている人がいたり、将棋や麻雀、俳句などのボランティアが来たりしているのですから、4階の利用者はかなり活動的だと言えそうです。

私はこの施設の2階に週一回出入りしてもう1年4ヶ月になりますから、2階の様子はかなり知っているつもりです。そこで見るのは、利用者にいじめられる介護者ではなく、介護者を恐れる利用者の姿です。

施設として必要なことは、利用者に生活に必要な最低限のサービスを能率的に提供する、ということです。食事や排泄、着せ替え、入浴など、決められ標準化されたサービスを手際よくこなしていく必要があります。そのために切り捨てられていることがあります。先日私がベッドの横で話している利用者の所へ介護者が来て、「〇〇さん、大福餅食べる」と聞いていました。「結構です。どうせミキサーにかけたものでしょ。」とその人は断っていました。餅を喉につまらせてはいけない、だから大福餅も喉につまることがない状態にして提供しなければならない、というのが施設の考えであることはよく分かります。しかし大福餅をミキサーにかけたどろどろのものを、果たして大福餅と言えるのでしょうか。

「この水はちゃんと飲んで下さいね。飲まないとなんか病気になるんだから。」脱水症

状になるのを恐れて、一日に一定量の水を利用者に飲ませようとしています。飲むのをいやがる人にも、これはあなたの健康のためよ、と無理矢理飲ませます。

こうして利用者の安全や健康を維持するために考えられた標準化されたサービスが能率よく提供されていくわけですが、この標準化されたサービスが利用者のすべての欲求を満たしているわけではありません。満たされないものを満たすには、介護者の好意に頼ることになります。

「そんなにナースコールばかり押さないでよ。もっと困っている人が大勢いるんだから、そっちへも行かなくちゃいけないでしょ。」ときつい声で言われている人がいました。標準を越えた介護者の好意に頼る部分をどれだけ頼めるかは、介護者の人柄によって違ってきます。夜勤では介護者は昼に較べて人数が減ります。あまり優しくない人が夜勤だと、嫌な思いをしなければならなくなります。だから今日の夜勤者は誰か、ということに利用者は関心を持っています。

私が傾聴活動のために週一回訪ねていく利用者は、左手が動かず、ベッドに寝たきりです。毎回必ず私に細々した仕事を依頼されます。「タオルがいくつあるか見て下さい」とか、「歯ブラシは引き出しに入っていますか」とか、「ティッシュの箱に私の名前を書いて下さい」とかです。爪切りを頼まれることもあります。それは介護者に頼むと爪切りを使わずに鉏を使うので、指を傷つけられやしないかと気になるからだそうです。

自分が気になっているけれども、介護者に頼むと何か言われそうなことを、介護者より気軽に頼める私に頼まれるわけです。そして一々有り難うございました、とお礼を言われます。

私の目に映る介護者と利用者との関係はこのようなものです。介護者がいつも忙しそうに働いていて大変だなあとは思いますが。しかし利用者に近い目で見ると、こんな両者の関係が見えます。

元気な人たちがいる4階では、Aさんが明らかにしたような介護者に対するいじめがあるのかも知れないと思って、施設全体を見ているケアマネージャーに聞いてみましたが、そんなことはないそうです。もし起きたとしても、それは認知症からくるもので、そのようなものとして対処します、と言っていました。

私はここに二つの対照的な利用者と介護者との関係を書きました。Aさんは介護者を調査した結果を述べています。私は介護者よりも利用者に近い立場から観察したことを述べています。情報源の違い、視点の違い、施設の違い、いろいろな違いがあるでしょう。しかしこの二つの描写は、リアリティを把握する難しさをも示しています。

ここには老人施設にお勤めの方や、施設をよくご存じの方も多いたと思います。この二つの描写をどのようにお感じになりますか。

質的研究は真実に肉薄する。

老年学土曜随想第15号 05年5月21日

昨日の朝、素晴らしい傾聴活動の現場を目撃しました。実はそれはドラマの中だったのですが。NHKの朝ドラをご覧になつていますか。優という女子高生が主人公です。優は自分が仲間はずれにされるのを恐れて、小学校からの友人を犠牲にし、その子を仲間はずれにしてしまいます。自分の行為に悩み、優は学校へ行けなくなります。その事情を両親に話しませんから、父親はなぜ学校へ行かないんだ、行け、と優を追いつめます。それに対して母親は、厩舎で好きな馬に抱きついて涙を流している優の姿を見て、その悩みの深さに気付きます。優が炊事をしていたとき、手に火傷をします。優はすぐに蛇口から流れる水で手を冷やします。その時母親は優に寄り添って、その手を自分の両手で支えます。「自分でやるからいい。」と優は言いますが、母親は手を添えたままこう言います。「苦しんでいるのね。」その時優の目から涙がこぼれます。

素晴らしい傾聴活動の場面ですね。私は涙が流れそうになりました。優はその時、学校に行かない自分をそのまま受け容れてくれ、自分の悩みに共感してくれる母親を感じたことでしょう。これが傾聴だ、と思いました。

私は研究の一環として、最近多くの傾聴ボランティアの研修を受けた方々のご協力を得て、お話を伺っています。そしていろいろなことを感じています。昨年の夏、多くの方々にアンケート調査にご協力いただきました。あの調査結果を統計的に分析しますと、傾聴ボランティア活動をおられる方は、例えば人との付き合いがよく、毎日機嫌よく暮らしていて、仕事をお持ちではない方、そして傾聴ボランティア活動が比較的によりよく理解されていると思っておられる方、というような結果になります。

ところがお会いしてお話を伺っていると、もっと違った姿が現れてきます。家族やご自身にさまざまな悩みをお持ちになっていて、それを乗り越えながら傾聴ボランティア活動をなさっているという姿です。また常々社会的な貢献をしたいと考えておられて、それが新聞やテレビでの報道を見たことが切っ掛けになって傾聴ボランティア活動に入っていったという姿です。大学生などの若い人のボランティア活動と違って、傾聴ボランティア活動をなさっている方々はずっと長い人生を過ごしてこられた方々ですから、ボランティア活動はその人生の中から滲み出てきたものと言えるでしょう。

ボランティア活動というのは一言で言えば、恵まれた人が弱者を助けるためにやる行為、という研究結果もあります。しかしお一人お一人にお話を伺うと、その方の人生の中で行き着いた、ご自身の生き方の表れ、というように、私には感じられます。

私の修士論文 Mixed Methodology で見えてくる深い現実

老年学土曜随想第 17 号 05 年 9 月 24 日

今回は私の修士論文に関連する話しをさせて下さい。そのタイトルは「Mixed Methodology による傾聴ボランティアの研究」です。この Mixed Methodology とは何か、という話しです。横文字で書いてありますが、これは 2 つの研究の方法を使って研究している、という意味です。一見難しそうですが、そんなことはありません。

昨年の夏にホールファミリーケア協会のご好意で、この協会が 1999 年以来に実施した傾聴ボランティア講習会の修了生約 1,700 人を対象にアンケート調査をさせていただきました。約 500 人の方々が調査票を送り返して下さいました。

その方々のデータを統計的に処理して、「活動している人」と「していない人」にどのような特徴があるかを調べました。これはごく普通のアンケート調査の方法です。

その結果、統計的に「活動している人」と「していない人」との間に明らかに違いがあるといえる項目が浮かび上がってきます。

それによりますと傾聴活動をしている人びとには、次のような特徴があることが明らかになりました。

○友達、近所、親戚などとの付き合いがよく、地域活動、学習活動など、社会的活動が盛んで、傾聴以外のボランティア活動にも積極的に参加している

○毎日の生活や家族との付き合いに満足が大きく、自分の将来などに不安が少ない

○毎日の生活が活気にあふれている

○傾聴活動は重要で、また自分が力を発揮できているという気持ちが強いなどです。

こうして、この分析によって傾聴ボランティア活動をしている方々のイメージが浮かび上がってくるのですが、そのイメージと私が接している方々の印象との間に何かずれがあるように私は感ずるので。

例えば、私が一緒に講習を受けた方々や、傾聴ボランティア活動の中で接している方々の中には、家族に認知症のお母さんがいたり、障害を持った人がいたりして、毎日を苦闘している方や、ご自分が障害を持つ不自由な身でありながら活動している方、ご自分やご主人が癌の手術を受け、再発の不安を抱えている方など、一言で言えば「苦難と闘いながら」傾聴ボランティア活動をしている方々が少なからずおられます。そのような方々の姿は、このアンケート調査の結果からは浮かび上がりません。このようなずれはなぜ生じるのでしょうか。

それは一つにはわれわれがアンケート調査票を作る時、そのような苦難と闘っている方々を想定していなかったから、それを明らかにする質問を調査票の中に入れなかったからです。アンケート調査では、調査票で尋ねていないことを明らかにすることはできません。

もう一つの理由は、そのような苦難と闘っている方々の存在は私に強い印象を与えますが、全体の人びとの中では少数派に過ぎないということです。ですから全体を平均的な姿でとらえるアンケート調査による方法では、そのような方々の姿は全体の中に埋没してしまって、浮かび上がってこないのです。

しかしそのように苦難と闘いながら傾聴ボランティア活動をしている方々の姿は、ボランティア活動というものの本質的な姿を示している、とも考えられます。われわれは誰で

も何らかの障害を乗り越えてボランティア活動をしています。障害が活動を妨げる力はそれらの人びとほど強くないとしても、ボランティア活動するには心の中で何らかの抵抗を乗り越えているはずです。

例えば周りの人びとの目はボランティア活動に必ずしも好意的ではないかも知れません。なぜそんな偽善的なことをやるの、という冷たい目で見られるかも知れません。また多くの方には、いろいろな趣味の活動をして、もっと豊かな思いで生活したいという気持ちもあるでしょう。少々腰痛があつたり、健康に不安があるという方もおられるでしょう。多くの方々がそんな何らかの障害を乗り越えて、傾聴ボランティア活動をしていると考えれば、苦難と闘いながら傾聴ボランティア活動をしている方々は、それらの多くの方々の気持ちを一番分かりやすい姿で代表している人たちだ、と言えるでしょう。

だからその代表の方々に、なぜ苦難を乗り越えてまで傾聴ボランティア活動をするのか、という理由を詳しく聞けば、それは多くの方々の活動する理由を説明するものでもありません。これが少数の方に面接調査をするという研究方法の意味です。そしてこのような方法で調査することによって、アンケート調査から得られる結果とはまた違う、現実の把握ができるはずです。

アンケート調査の結果の統計的な処理と、実際に活動しているか、していないかの回答から、苦難と闘いながら活動している方が多いのではないかとグループを選び出しました。そのグループの中で追加調査に応じると言って下さった方に面接調査をさせていただきました。

一時間程度でお聞きした内容をK J法という方法で分析し、活動の動機を明らかにしました。それを要約して述べると、次のようになります。

ボランティア活動はその方の「人生の表現」です。「これまでの人生の中から滲み出てきた活動」であるし、また「これからの生き方の表現」です。

豊かで余裕があるからボランティア活動をする、という理論（社会優位性モデル）もありますが（そして今回のアンケート調査の結果もこれを肯定するものと言えますが）、面接調査の結果は、むしろ「悩みを持ちながらの幸せ」という状態が明らかになりました。悩みが大きすぎたり、経済的に困窮している場合は、ボランティア活動はできません。「幸せだからボランティアができる」のですが、この幸せは自分や親や家族などの中に悩みを抱えての幸せなのです。

傾聴ボランティア活動では「疎外を超えた人との関係」が結べます。「役立っている実感が励み」になりますし、「無償のすがすがしさ」があります。

そして「自分の成長を楽しむ」ことができます。「ボランティア活動は自分のため」なのです。

このような説明は、現在ボランティア活動をしている多くの方々に「そう言えば、そうだな」とある程度納得していただけるのではないのでしょうか。

アンケート調査の結果とかなり違うことがお分かりいただけたかと思います。研究方法の違いで、つまりものを見る見方の違いで、現実の見え方が変わってくるということがお分かりいただけたことと思います。このような量的研究といわれるアンケート調査と質的研究といわれる方法とを組み合わせ、現実をより深く見ていこうというのが私の研究です。

質的研究では私は面接調査とK J法という方法を使いましたが、それ以外にいろいろな方

法があります。そして今医療や介護の現場の姿を明らかにするために、質的研究が多く使われるようになってきています。

2つの研究方法 その違いは何か。

老年学土曜随想第18号 05年10月1日

今日から10月。今年も余すところ3ヶ月となりました。国家公務員たる私は、今日は稼ぎ時です。「75歳のおじいちゃんが国家公務員？」と馬鹿にしないで下さい。これでも麻生太郎大臣名の辞令をもらったれっきとした国家公務員です。タネを明かせば簡単なこと。私は国勢調査の調査員なのです。

ところで前回の老年学土曜随想では、アンケート調査という量的調査と、面接調査という質的調査とでは、現実の見え方が違って来る、ということを書きました。今回はこのことをもう少し深く書いてみたいと思います。こんなことにあまり興味がない方には、退屈な議論かも知れません。しかし見方によってものが違って見えるということは、ぜひご理解下さい。

社会学や人間行動の研究には二つの研究方法がある、ということは、いろいろな学者が、その表現に違いがあっても、言っていることです。「仮説生成法」と「仮説検証法」とお茶の水女子大学の箕浦康子教授は言っていますし、京都大学の杉万俊夫教授は「自然科学と人間科学」と言っています。また傾聴ボランティア活動に力を入れておられる京都ノートルダム女子大学の村田久行教授は「デカルト的な二元論による研究方法」と「他者の理解と共感に基づく研究方法」と言っています。「認識論的客観主義の立場である規範的パラダイムと、認識論的主観主義の立場である解釈的パラダイム」と言っているのは立教大学の教授だった下田直春氏です。

杉万教授はとても分かりやすい表現で自然科学と人間科学との違いを述べていますので、それをご紹介します。

「(自然科学の)論理実証主義とは、平たく言えば、私たちが、小学校以来の理科の時間に習ってきた常識(方法論的常識)である。それは、次のように整理することができる。①科学の主な役割は、観察可能な現象の間の関係に関する普遍的法則や原理を構築することである。

②普遍的法則や原理は、経験的事実と一致すべきである。科学的探求とは、理論体系の客観的基盤を確立することである。

③理論的命題を経験的・実証的に評価し、命題からの演繹をし続けることによって、科学は進歩可能である。つまり、科学的知識は累積していく。」われわれが常識で「科学」と考えているものがこれに当たります。

しかしこのような科学では解決できない問題がある、と杉万氏は言います。「(自然科学の発展がわれわれの生活に貢献している)その一方で、自然科学では手におえない問題、しかし、私たちにとって非常に重要な問題もあります。例えば、手術を前にして不安におびえる患者さんに、どう接したらよいのかという問題、新人の看護婦をどう育てていったらよいのかという問題、婦長や主任が職場をどう運営していったらよいのかという問題、等々。従来、このような問題に対しても、強引に、自然科学の流儀で取り組んできました。あるいは、科学(自然科学)の外の問題、つまり、人格的持ち味の問題とか、経験と勘によってしか解決できない問題とみなされてきました。

ところが、近年、このような問題を真正面から適切に取り扱っていきける、もう一つの科学---自然科学と並ぶ、もう一つの科学---が主張されるようになりました。そのもう一つの

科学こそ、本書で紹介する人間科学です。もはや、科学＝自然科学ではなく、科学＝自然科学＋人間科学なのです。ただし、人間を対象にする科学が、イコール人間科学ではありません---人間の生理的構造や機能を研究するのは、自然科学です。」

では彼の言う自然科学と人間科学は何が違うのでしょうか。「自然科学と人間科学には、対象（あるいは、問題）と研究者（あるいは、問題を解決しようとする人）の関係において、大きな違いがあります。言いかえれば、研究者が研究対象に対してとる姿勢（スタンス）に大きな違いがあるのです。」

研究者と研究対象との関係が違うのだ、と言っています。「ここで、両者の違いを、ごく簡単に述べておきましょう。自然科学では、研究者は、対象との間に一線を引き、その一線の向こう側に対象を据え、研究者は一線のこちら側から、クールに、客観的に対象を観察します。これが、自然科学の基本となる流儀です。一方、人間科学では、研究者と対象の間に、そのような一線など引けないという前提、つまり、研究者と対象は、いわば溶け合っているという前提からスタートします。」

前回述べたアンケート調査と面接調査とを比較してみましょう。アンケート調査は調査票を配り、それに記入してもらった回答をコンピュータに入力して、後は統計的な手法を使って、このデータとこのデータには関係があるとか、ないとかという結果を出します。その結果は現実を正しく反映しているものと考えます。この方法は研究者と研究対象との間に一線を引いた対立的な関係があります。

それに対して面接調査では、調査者と被調査者が共同して、真実に迫っていこうとします。私もいろいろなところで、なぜボランティア活動をするのですか、という質問に回答を書かされることがあります。そんな時には適当に相手が納得してくれそうな答えを書いておきます。しかし本当のところ、自分がなぜ喜んでボランティア活動をしているのか、私自身にもよく分かりません。面接調査であれば、調査者は私の回答を聞きながら、その人の解釈も入れて、次々と質問をしてくるでしょう。そういう方法で、二人で共同して対象に迫る過程が繰り返し広げられることとなります。このように面接調査では、研究者と研究対象との間には一線が引けないのです。このようなところに二つの研究方法の違いがある、と言えるのではないのでしょうか。

このような研究方法論に関するお話しには、あまり関心のない方が多いのではないかと思います。しかし傾聴ボランティア活動をしている私には、傾聴をしている時の自分と相手の方との関係にもつながる問題です。次回にもう一回だけさせて下さい。

国家公務員たる私は、今から国勢調査票の回収に出掛けます。これは対象と一線を画し、できるだけ正確に日本の人口を測定しようとする、れっきとした量的調査です。

研究者と研究対象との2つの関係の仕方から医師と患者との関係を見る。

老年学土曜随想第19号 05年10月8日

これまで2回、研究方法論について書きました。研究方法論は大きく分けて二種類あり、その違いは研究者と研究対象との関係の仕方にある、ということでした。今回はこの点を傾聴ボランティア活動をしている私の立場に引き寄せて、述べさせて下さい。

次の文は長年立教大学で教鞭を執っておられた早坂泰次郎先生の文ですが、どこに書かれたものか分からなくなってしまいました。先生は現象学者という立場から心理学を研究しておられました。私は40年近くのお付き合いがあり、娘が登校拒否をした時にもお世話になったのですが、当時現象学に全く興味がなかった私は、今思うと宝の山に足を踏み入れながら、そこが宝の山とも気付かず、先生に対しても申し訳なかったと思っています。先生はすでに数年前に他界されました。

「精神医学で、医者が患者をどう見るかという点について、大きく二つに分けることができる。一つは医者と患者というものは、全然別世界の人間であり、質的にちがうのだという考え方である。もう一つは精神病患者と医者または正常人のちがいは、量的なちがいでしかないという考え方である。」「フランスにミンコフスキーという学者がいる。この人が『精神分裂病』という本を書いているのだが—日本語訳もある—この本の中で彼は、医者が患者をどう見るかという見方自体が、治療にとって重要な意味をもつていると主張する。その意味は、次の通りである。精神病患者は自分たち正常人と質的にちがうという見方をとる医者は、いってみれば自然科学者が自然現象に対するのと同じ見方をしている。すなわち対象と自分とは質的にちがうと考えるのだ。たとえば、われわれが気象現象に対した時、あした晴れてほしい、とこちらがどんなに切望しようが、あるいは雨が降ってほしい、と願おうが、こちらの構えや願いとは関係なしに、それ自体のメカニズムで気象現象は起こる。自然現象は、自然科学者がどういう態度をとるか、とは無関係に、自然現象の理法自体でもって起こるわけである。

同じように医者が相手を質的にちがうとみなすことは、患者を医師とは全く無関係な、正常人間には了解できない、それ自体のメカニズムで動く自然的対象とみなすことを意味する。こうして了解の不能性、あるいは疎通性の欠如を、とくに、精神分裂病の中心的特徴とみとす考え方が生まれてくる。そこでは医師が患者にどういう態度をとるかということとは相手の示す反応とは関係がないと考えられるのである。したがってそこから出てくる治療法は、原理的には生物学者が動物に対してとるのと同じ態度で行われることになり、自然科学的なものでなければならぬということになる。

それに対して、第二の正常人と分裂病患者とは量的にしかちがわないのだという見方に立った場合それは、ことばをかえれば、一見意思疎通が不可能に見える分裂病患者にも了解の可能性があるので認めることである。ことばをかえれば、ある学者(フロム・ライヒマン)が書いているように、分裂病とか、躁鬱病とかいった精神病患者にも健康な部分があり、その健康な部分に訴えることによって、医者と患者との間には、話しあいをすすめていくことができ、それによって患者は癒されていくというわけである。したがってその結果考えられる治療法における特徴は、医者が患者に対して、どういう態度をとるかが、治療そのものにとって重大な問題になるところにある。

この第二の見方から、精神病というものを精神療法、心理療法でなおしていこうという

考え方が出てくるわけである。これは非常に注目すべき視点だと思う。第一の立場(質のちがいと考える)からは、精神病の心理療法ということは少なくとも治療の主要部分としては考えられることはない。第二の立場ではそうではなくて、人間的な触れ合い、了解、それから、患者に対する医師の態度ということが原理的に最も大きな意味をもってくることになる。」

このように医師と患者との関係の仕方の違いが大きな意味を持つわけですが、淀川キリスト教病院というホスピスの医師、柏木哲夫氏はこの問題に関して興味ある考えを述べています。

「目の高さが揃うということは、人間として平等であることのひとつの象徴だと私は思っております。不思議なことですが、(ベッドに寝ている患者に対して)立って話をしていたときには、『あなたは死ぬ人。私は生きる人』という感じが私にはありました。ところが座って話をするようになってからは、『あなたは死ぬ人。私もやがて死ぬ人。死ぬ時期が少しズレますけれども、このズレだけはお許しくださいね』という気持ちでケアをすることができるようになりました。『座る』という小さな行為、しかしその奥にある平等意識や時間の保証は、人間の心にとつてかなり重要な要素だと思います。」

この意見を、基本的には患者を自分と同質の人と見ている医師でも、目の高さといった些細なことで異質な人と感じてしまう危うさを述べているように、私は思います。それ程まで、デカルトの二元論はわれわれ近代人の思考に染み込んでしまっている、ということでもあるのではないのでしょうか。

われわれの傾聴ボランティア活動の対象には圧倒的に認知症の方が多いのです。認知症の方をどのように見るか。ベテランの中にも「認知症の人を知っている？彼らは何も分からないのよ。」という姿勢をとる人もいます。これは明らかに認知症の人と傾聴するわれわれとは異質である、われわれは彼らを理解できない、という立場です。「受容」と「共感」を旨とすべき傾聴の姿勢ではありません。しかし健康な人のような反応を示さない相手に対して、そのような姿勢をとりたくなることは否めません。

早坂先生の文を続けましょう。「この第二の立場を明確にしながら分裂病者の精神療法による治療に貢献したのは、フロム・ライヒマンという、アメリカの女性の精神分析学者である。もともとはドイツ系のユダヤ人であり、ナチスに追われてアメリカに移住し、アメリカで死んだ彼女は、精神病者の精神療法の要点を、一口でいうなら、医者が患者のことを「傾聴しうる能力」を持つこと、*to be able to listen* であるといっている。このことばは平凡に聞こえるけれども、実はたいへんな重さをもっている。

というのは、彼女は書いているのだが、ある兇暴性をもった患者がいる。危険だから個室に保護されている。だれも中へ入ることはできないという状態で、その患者の担当となったフロム・ライヒマンは、毎日その患者の病室の前で、三〇分ぐらい「ここにいますよ」といって立っていたという。そしてそれを数か月の間、毎日つづげた。そうしたら、ある日、突然中へ自分を招き入れてくれた。それ以来患者との話しあいは始まり、それにつれて患者はだんだん好転していった。なおってからあとで、患者にいろいろなことを思い出してもらおうと、病気が本当にひどいときのことは夢を見ているようで覚えていない。しかしその中で、フロム・ライヒマンを招き入れたときのことは覚えており、結局その時から治療が始まっていったと考えられる、というのである。フロム・ライヒマンの「傾聴し

うる能力」ということばは、こうした、たいへんな努力を含んでいるわけである。」

ああ、傾聴とは楽なことではないんだ、と傾聴ボランティアであるわが身の引き締まる思いです。

しかし次の小澤勲氏の「認知症とは何か」（岩波新書）の29頁に書かれた言葉は、そんな私の慰めになります。彼はこう書いています。

デイケアの利用者に気むずかしい、かなり認知症の進んだ男性がいて、ほとんど何もしゃべらなかったそうです。その方がデイケアから老人ホームへ移ることになりましたが、特に何の反応も示されなかったので、自分が家から離れて老人ホームへ入所するということが分かっていないのでは、とスタッフが話していました。ところがいよいよ入所ということになった頃、その方が一人のスタッフをつかまえて、「あんたと一緒に買い物に行ったな」「あんたに故郷の話しをしてもらったな」「みんなとチャンポンを作ったな」というような話しをされたそうです。これを泣きながら報告するスタッフに小澤さんはこう言います。

「そうだね。認知症を病む人って、心に深く刻み込まれた情動を伴う経験は忘れていないんだよね。それを言葉にされなくてもね。みんなのケアが彼の心に届いたのですよ。」

研究者と研究対象との関係 小説とも見まがう「医療人類学」

老年学土曜随想第 43 号 06 年 4 月 1 日

「通常の個室では、終末期の子どもが痛み止めのモルヒネの効果でうとうととしている。そのかたわらに母親がいる。まだ若い。もう命いくばくもないわが子を見つめている。この世に生を受けてからその子はまだ 5 年しかたっていない。5 年間しか一緒にいられなかった母と子。子どもは、うとうとと眠りながらも手はそこだけ眠っていないかのように母親の手をしっかりと握っている。そこだけ違う時間が流れている。」

「私は記憶する。心に刻み込む。この情景と雰囲気を決して忘れまいと。個室から、個室独自の時間の流れが、音を立てて私に迫ってくる。カーテンは几帳面に閉められている。でも感じる。かすかな生が圧倒的な死と対峙しているという密度の濃さを。母親と子どものあいだを、『思い出』という『生きていること、生きてきたこと』の証が駆け抜けていることを。私は途方にくれた立像のようにその個室の前に立ち尽くしている」

この文章はどのような種類の文だと思われますか。小説？ ルポルタージュ？ 随想？ いえ、これは医療人類学というれっきとした学問的視点から書かれた文です。田代順著「小児がん病棟の子どもたち」（2003 年、青弓社）の一節で、この本には「医療人類学の視点から」という副題が付いています。

こんなに筆者の個人的な感情がむき出しになった感情移入の激しい主観的な文が、どうして「医療人類学」という学問的な観点から書かれた文なの？ そんな感想を持たれた方が多いのではないのでしょうか。こんな文を修士論文で書けば、間違いなく指導教員から「論文は小説じゃないんだぞ」とお叱りを受けることでしょう。

学問的であるとは即ち客観的なことである、研究者の個人的な感情を入れないことである、というわれわれの多くが持っている常識で考えれば、この文が学問的な文であるという事は理解できないことです。

実は私はこの本そのものを読んだのではありません。好井裕明著「『あたりまえ』を疑う社会学」（2006 年、光文社）に引用されているのを読んだに過ぎません。好井のこの本には「質的調査のセンス」という副題が付いています。

では好井は何のためにこの田代の文を引用しているのでしょうか。「印象深い優れたフィールドワーク」の例を示すために引用しているのです。だから好井は次のように言います。

「個室の前で立ち尽くし、彼らの様子を見抜こうとする田代さんの記述は、ただ観察できたものだけをもとに冷静に語られているとは、とうてい思えない。死を前にして静かに沸騰する母親と子どもの思いや生の迫力とでもいえそうな何か簡単には説明できない濃密で特別な時間があふれだし、彼に迫ってくる。観察という営みを超えて、そのリアルさを、なんとか表現しようとした結果、語りだされた記述だろう。

こうした記述に対して、情緒過剰気味で、文学的な、あるいは小説のようなレトリックを使ったものであり、論述とはいいがたい、などと『くだらない』評価をしてほしくはない。」（好井裕明著「『あたりまえ』を疑う社会学」2006 年、光文社）

私のような論評があることを予め予測して、そんなくだらないことを言うな、と好井氏は釘を刺しているわけです。

ここで問題となってくるのは、研究者と研究対象との関係です。この両者の間には越え

てはならない一線を引くべきである。研究者は研究するに当たって、研究対象に対して影響を与えてはならない。これが科学の姿勢であると考えられてきました。その発端は近代的自我を明らかにしたデカルトに遡ります。

しかし科学ってそんなものなの？ いつも研究対象から一步退いて、離れていなければならないの？ いつもそんなことができるの？ という疑問も、生きた人間を対象として研究している人びとの間から提起されています。

前にもご紹介しましたが、現象学の立場に立っておられた心理学者、故早坂泰次郎立教大学教授は次のように言うておられます。ハンドボール部の控えの学生にはよく見えている一瞬の反則プレーが、その部の部長である早坂氏には全く見えないことを述べた後、その違いの理由が「彼はゲームの中で、ボールと共に、あるいはルールと共に、生きている。私のように野次馬的に外から見て一眺めて一いるのではないのだ。」と見る人と見られているものとの関係の違いにあることを指摘し、「真に見るとは、対象とのかかわりに入ること、対象との関係に入ること、それとともに生きることができて初めて、可能になるのだ。」（『『関係』からの発想』1986、非売品）と仰ておられます。

そして更に「こうした関心が対象への関心から始まることは当然だ。E・フロムはそれを『愛』と呼んでいた。対象への愛があってこそはじめて、対象はそれだけハッキリ見えてくる。人びとは普通、正確で客観的な認識には愛などは邪魔だと見なしがちだが、これは誤りだ。対象への愛はむしろほんとうにハッキリ見るための一いいかえれば真の客観的認識のための一必要条件だというわけだ。私も同感である。」と仰ておられます。これは研究対象とは一線を画すという近代科学の基本的な姿勢とは全く反するものです。

社会構成主義の立場に立つ社会心理学者、杉万俊夫氏は科学を「自然科学」と「人間科学」とに分けています。そして「自然科学」が研究対象とする事実には2つの特徴がある、と仰ています。その特徴とは、一つは人間が発見する前から存在しているということ（DNAは、そんなものがあるなんてわれわれが知らない昔から存在している）であり、もう一つはその事実が発見され、世の中に知れ渡っても、その事実そのものが変化することはない、ということですが。

それに反して人間科学における事実は、「当事者たちが、その事実を知っているからこそ、事実となる」のです。世の中には「自然科学の基本が通用しない現象がある。つまり観察者と観察対象との間に一線を引いて、両者を分離することが不可能な現象である。そのような現象では、観察者が好むと好まざるとにかかわらず、観察者と観察対象との間に相互作用が生じてしまう。言いかえれば、観察者と観察対象による共同実践が進行してしまうのである。」（杉万俊夫編著「よみがえるコミュニティ」2000年、ミネルヴァ書房）と仰ています。

ここで最初の文章に戻しましょう。こうした二つの科学の違いを知り、それを納得した後でも、「個室独自の時間の流れが、音を立てて私に迫ってくる。」とか、「かすかな生が圧倒的な死と対峙しているという密度の濃さを。」とか、「そこだけ違う時間が流れている。」といった表現にはなお違和感を感じます。その一つの理由は、この短い文を読んでいるだけなので、著者である田代がこのような感情移入をするに至った観察の経緯を読んでいないからでしょう。それを丁寧に読めば、おそらくそこに田代の観察対象に対する「愛」を感じることができ、そして好井裕明氏と一緒に「おそらく田代さんのこのような

語りは、「病棟社会」でひそかに息づいている子どもたちの思いや母親の静かで強烈な叫び、死を前にした子どもたち一人一人に流れる時間の音など、感じ取れるが的確に語り得ないものを、なんとかして伝えようとする、著者のあえぎにも似た努力の結果だ」と言えるようになるのではないのでしょうか。

「守破離」の「外から吸収」よりも「内なる美意識から」 武田双雲流の学び方。

老年学土曜随想第 45 号 06 年 4 月 15 日

私は字が下手なものですから、結婚披露宴などに行って受付で署名するとき、いつも劣等感を持ちます。そこには墨痕鮮やかな署名が並んでいるからです。読みやすいのが俺の取り柄、と自分を納得させながら、金釘流の下手な署名を書き加えたものです。この年になると結婚披露宴に出ることもあまりなく、そういう点ではほっとしています。

私は小学校の時に暫く習字を習いに行っていたことがあります。父親は「その内タイプライターが普及して、字なんか書かなくなるから、習字を習っても仕様がな。」と反対しました。しかし父の反対はそれ程強いものではなく、母が勧めましたので、私は一年間ほど習字を習いに行きました。

習字の先生はまず手本を与えて、できるだけ手本通りに書くように、と言いました。書いたものを先生に見せると、赤い筆でまずい所を修正してくれました。

習字というのは模範的な書き方があって、それにいかに近づくかを学ぶものだと思っていました。

父の「その内タイプライターが普及して、字なんか書かなくなる」という予言が現実のものとなったのは、私の場合は今から 2 3 年ほど前でした。それは父の死後でした。

当時アメリカの経営学の本や論文を盛んに翻訳していましたが、手書きの場合は机の周りに消しゴムのごみが散らかり、とても汚くなりました。自分の日本語の表現が気に入らず、何回も書き直していたからです。しかしワープロを導入したら、その汚れが全くなくなり、家内から喜ばれました。また推敲がとても楽になりました。しかし 5 インチのフロッピーに保存するとき、容量が小さいため、一つの論文の訳をいくつものフロッピーに分けて保存することが必要な時期もありました。

これは何も習字に限ったことではありませんが、そもそも「学ぶ」の語源は「真似る」にあるとも言われています。日本の伝統的文化には、「守破離」という言葉があります。世阿弥の『風姿花伝』に書かれてあると言われている言葉です（私はまだ自分で確かめていませんが）。

学習の段階を示すものです。最初はひたすら師の教えを守り、次に自分なりの発展を試み、最後には型を離れて独自の世界を創り出していく、という意味です。ですから最初の段階は師を手本とし、師を真似ることから始めるわけです。

経営学でもベンチマーキングという経営手法がもてはやされた時期が 1 5 年ほど前にありました。これは一言で言えば「ベストの他社を真似る」ということです。いろいろな会社の中からベスト・プラクティス（経営や業務のもっとも優れた例）を探し出して、自社のやり方とのギャップを分析し、そのギャップを埋めていけるように自社の変革を進める、という経営管理手法です。1990 年代に米国の企業が急速に業績を復活させた一つの原因は、8 0 年代に日本企業の手法をベンチマークとして学び、改善を図ったことも一因と言われています。

個人としても、「あの人のあそこを真似しよう」などと考えることは珍しいことではありません。人から学んで、自分を向上させようと心掛けることは、謙虚で美しい行為と考えられています。

このように、実現すべき理想の姿はいかに内在化されてはいても、元々は外から来たも

の、と考えていた私は、ある日ふとテレビで見た武田双雲という若い書家の言葉に衝撃を受けました。彼は書道の学習は模範的な字を真似ることではないと言っていました。ではどうするのか。彼のホームページに出ている彼のインタビューから、彼の考え方を探ってみましょう。

○（インタビューアー）上手くなるには、他人の書いた字を真似ることから始めるわけですか。

●（武田双雲）お手本はありましたが、例えばひら仮名の「た」の字の角度を変えてみたり、ふわっとさせたりとか自分で考えながら書いていました。学校の先生の字を真似たり、女の子の丸文字を真似たり、下手な男の子の字を見て喜んだり。なんでそういう字になるかが不思議で、字に現れる個性に興味がありました。「下手だけど何かいいなあ」とか、そういう直観で感じられることに小さいときから興味がありました。

○上手・下手という判断がある以上、やはり正しい書き方、基本があるわけですね。

●母に教えられた「正しさ」の基準はありますが、「どうやったらうまく書けるか」については自分で考えてきました。人はもともと美意識を持っていますよね。富士山を見て「美しい」と想えるとか。やはり物事には「美しいと感じられるバランス」があります。それと同じで、自分の中にある美意識に問い掛けをするんです。それが全体として「武田双雲」流の基本になったと思います。

人はしゃべるにも、歩くにも、書くにも、服を着るにも美意識が働きます。美しくありたいという想いがあります。字を書く時も「美しく書きたい」という想いを誰しもが持っています。それを信じること。

美しさは、お手本とか外にあるのではない。字が下手だと思っている人は自分の字が嫌いなわけですが、自分なりの美意識は持っているわけで、それを追求していくことが美しさになるんです。

書道というと難しく考えがちですが、ノートに鉛筆で書くのであれ、パソコンのモニターであれ、字を書いているのには変わりなく、書くことは一生なくなりません。そうした「書く」行為の中で、いまより意識を少し注ぐだけでもいい。「もう少しきれいに書いてみよう」。そのプロセスが大事で、だから結果はどうでもいい。

○外から何かを付け加えるのではなく、内から引き出すプロセスが重要？

●外から吸収して何かを取り入れるというよりも、自分に問いかけ、ヒントを外部から要素としてもらう。これはちょっとした違いのようで大きい。はなから真似よう、学ぼうとするよりも、自分が自分に問いかけ、自分と対峙することが大事。

お手本を真似ればそれはそれで上手くなるけれど、それよりは自分で「いつもより縦画を長くしてみよう」と試みる。試みのプロセスでは失敗はしますが、ふとした瞬間、フィットした距離感の感覚が芽生えます。そのときにお手本を見たら、「なるほど」とそのお手本が示している意味がわかります。

これはスポーツでも勉強でも言えることで、「自分は何も知らないからゼロなんだ」と謙虚になりすぎて、何でも外から取り入れようとする。それも答のひとつだけど、能動的な問い掛けがあることが重要だと思っています。

以上がインタビューです。

守・破・離は道を極める為の成長段階を示した言葉で、前にも述べたように次の三つの段階に分けられます。

守＝ひたすら教えを守り、学ぶ

破＝教えの言葉から抜け出し、真意を会得する

離＝型に一切とらわれず、自在の境地に入ること

このように、「自分は何も知らないからゼロなんだ」という前提からスタートします。それに対して武田氏は「そんなことはないだろう。誰だって美意識というものがあるはずだ。その自分の美意識を信じよ。」と言います。

どちらの学び方を探るのか。それは人それぞれでしょう。私は武田流に魅力を感じますし、考えてみると、自分は何事にかかわらず武田流でこれまでやってきたのではないかとも思います。70年以上も生きてくれば、何事にも自分なりの考えがあるわけで、それを抑えて自分はゼロであると考えすることはできません。